

【治療中】 ああ、楽・・・

☆治療部位

〈腧鍼〉胸腹部

18:00 吐血あり。

11月22日

16:00 体がだるい。お腹が痛い。吐血2回。午後からない。

16:00 鍼灸治療9診目

うー。(鍼はどうしますか?) うー、して行って。

うー、あー。 先日までの円皮鍼を抜鍼。ガーグルベースが床に落ちており、吐血したもので汚染されている。担当看護師に報告。本日、上肢は血液汚染があり、下腿のみで行う。

☆治療部位

〈円皮鍼〉三陰交

11月23日 唸っている事が多い。

11月24日 逝去

【評価ポイント】

- VAS、NRS 等による評価
状態悪化に伴い、症状も悪化となる。
- 患者コメント
外来：しびれに変化はないが、治療中は気持ちがいいとウトウトされる
- 家族コメント
特記なし
- 医師・看護師・医療スタッフの印象
4時までには自身で体動されていた。昨日のように唸ったりされず、最後は穏やかであった。

【総括】

しびれに関しては、ほとんど変化がないという事であったが、入院中になり、鍼灸治療後にしびれが一時的に消失した。それらからも、全く効果がないわけではないため、やや有効とした。全身状態は鍼灸治療後から数時間は楽な状態が続くことから、有効であると診断した。

本症例では、家族やスタッフに言えない思いを鍼灸師に語られており、それをきっかけに話し合う機会を得ることはできていた。鍼灸師がチームに属する事で、より患者の思いを聴き、残された家族が「あの時、ああしてあげればよかった」などの後悔をしないためにも、家族ケアにも結び付けられる可能性があると考ええる。

20130025 (NO. 75)

【患者】 73歳、男性

【既往歴】 特記なし

【病態】 胃癌 (StageIV)

【ターミナル期】 術前

【現病歴】

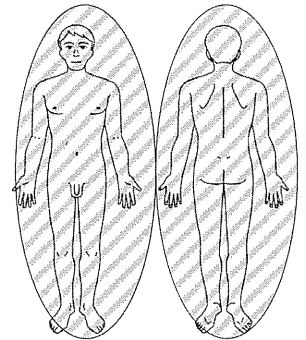
X年9月、術前化学療法入院。大きな副作用なく退院する。(8日間、CCDP) TS-1 服用終了の21日目に外来受診、倦怠感が強く、食事は何とか食べられている。下痢は3回/日あるときも。化学療法副作用と思われる、腎機能も悪化しており、経口摂取困難であるため、入院の上、補液を行う。ある程度、体力が戻ってきたため、化学療法再開。副作用である口内炎の出現により、口内炎の早期回復を目的に鍼灸治療併用となった。口内炎が改善したため、今回の化学療法による副作用予防のため引き続き、鍼灸治療介入となった。

【服薬状況】

TS-1

【鍼灸治療目的】

抗がん剤副作用予防に対して行った



【東洋医学的所見】

口渇あり。脈診：脾・腎弦。舌診：淡白、胖大、嫩舌。下腿浮腫。

【弁証】 腎気虚。(肝胃不和)、胃熱

【鍼灸介入期間】 18日間

【鍼灸治療回数】 4回/週、9回

【転帰】 退院

【鍼灸治療最終日～転帰】 4日間

【評価】 症状がでていなかったため、患者コメント、家族、医師・看護師の印象評価を採用する。

【鍼灸治療最終評価】

1) 化学療法副作用：やや有効

【治療経過】

10月22日

15:30 口唇は熱をもっていて、ピリピリする。経口摂取可能。

17:00 鍼灸治療1診目

口の渴きはないけど、唇は渇く。

脈診：脾・腎弦

舌診：淡白、胖大、嫩舌

触診：下腿浮腫

☆治療部位

〈円皮鍼〉右太溪、左陥谷、左外陥谷、左地五会、太衝

10月23日

17:30 鍼灸治療2診目

今日は、右足はちょっとひいている感じするな。左の方は
変わらん気がするけど。

脈診：肝・腎弦、細

☆治療部位

〈毫鍼〉右公孫、左太溪

〈円皮鍼〉左太溪

10月24日

15:30 泥状便多量にあり

16:30 睡眠中のため鍼灸治療中止

10月25日

10:00 食事中に時々まだ痛む

17:00 睡眠中のため鍼灸治療中止

10月26日 著変なく、経過している

10月27日

15:30 口腔内改善してきている

10月28日

15:30 なんとなく調子がすっきりしないです。

10月29日

8:30 TS-1+CDDP 2クール目開始

17:00 鍼灸治療3診目

全身倦怠感を訴える。1週間前と比べると足は軽くなった。

脈診：細、腎無力・微弦。左太衝深部軟弱・圧痛、右太溪陥凹、

左復溜緊張、左公孫表面緊張

☆治療部位

〈円皮鍼〉右太溪、左復溜、左公孫、右太衝

10月30日

8:30 絶好調です。

16:30 鍼灸治療4診目

あつい。あつい。のぼせた感じにポーっとするわ。口内炎
もない。浮腫みがまた少し出てきた。

脈診：数、肝・腎弦、脾洪、細

望診：顔面紅潮

触診：下腿浮腫（昨日より悪化）

☆治療部位

〈円皮鍼〉右復溜、行間、左三陰交

10月31日

9:00 心窩部に痛みあり。

15:30 鍼灸治療5診目

えらいわ。しんどい。重だるい。胃がやられとんのか、
グーッと重くなって食べ物が入らん。

脈診：腎無力、脾微弦

触診：四肢ほてり。寒さなし。下腿浮腫あり

（左足背は外側になるほど浮腫強い）

☆治療部位

〈毫鍼〉足三里、太溪

〈円皮鍼〉左陥谷、左外陥谷、左地五会、太溪

11月1日

15:30 口内炎は痛みなし。心窩部はもやもやする。

11月2日

10:00 だるい。左上肢はしびれとる。心窩部痛みなし。

11月3日

15:30 心窩部はちょっと変なくらい軟便1回

11月4日

15:30 今日何かフラフラするわ。ここ数日は身体がだる
い感じ。調子はいいんやけど。

11月5日

15:00 左上肢のしびれも持続しているとのこと

16:00 鍼灸治療6診目

うん。だるいね。便はある。

脈診：93回/分、脾滑、腎無力

☆治療部位

〈円皮鍼〉太溪、左公孫、左陥谷、左外陥谷、左臨泣

19:21 口内炎悪化なし

11月6日

16:30 鍼灸治療7診目

昨日と一緒に。しびれの部位は左上腕全部。しびれは
(NRS=)1、だるさは(NRS=)2。浮腫み無くなったやろ？

脈診：細、肝・腎微弦、腎無力

☆治療部位

〈毫鍼〉太溪、左太衝

〈鍢鍼〉左爪甲根部

11月7日

17:30 鍼灸治療8診目

昨日と変わらん。難しいなあ。しびれは(NRS=)2、

だるさは(NRS=)1くらいかな。昨日と一緒や。

脈診：数、脾滑、腎無力

触診：内踝周囲に軽度浮腫あり

☆治療部位

〈毫鍼〉左外関、左神門、太溪

11月8日

16:00 鍼灸治療9診目

足の浮腫みと手のしびれに対してやってもらってるんや。

しびれは、半月に1回あるかないかが、今じゃ常にある。

今日は、化学療法が楽でよかった。

脈診：81回/分、肺・肝弦、腎無力

触診：足背浮腫なし。

☆治療部位

〈毫鍼〉左太溪、右太衝、右合谷、左内関

〈円皮鍼〉右行間、太溪

11月9日

14:00 だるい。口内炎のチームの人に月・火あたりが一番しんど

い言われた。倦怠感持続しているが悪化なし。

11月10日 朝から泥状便。朝から4回あり。

11月11日 特に悪化なし。

11月12日 退院

【評価ポイント】

- VAS、NRS 等による評価

VAS、NRS 評価なし

- 患者コメント

9診目：家族との会話の中で「2度目の化学療法は楽な気がする」

- 家族コメント

9診目：家族との会話の中で「2度目の方がしんどいと思っていたけど、元気そうでちょっと安心しました」

- 医師・看護師・医療スタッフの印象

特記なし

【総括】

本症例は抗癌剤副作用予防に対して行った。症状がでていないため、明らかな効果はわからないが、2診目～3診目に睡眠中のため鍼灸治療介入していない期間では、体調がすっきりしないといったコメントがあり、患者に確認したところ「寝ていても起こして」との事だった。

これら総合的に副作用予防に対しては明らかな症状がでていなかったため、やや有効とした。

1. 緩和ケアチームでの取り扱い症例の治療概要

各症例の要旨

研究協力者：横西 望

明治国際医療大学鍼灸学部鍼灸学科 基礎鍼灸学講座

明治国際医療大学鍼灸学部鍼灸学科基礎鍼灸学講座：篠原 昭二、関 真亮、斉藤 宗則、和辻 直

明治国際医療大学 附属病院 外科学教室：神山 順、糸井 啓純

市立福知山市民病院：中村 洋子、川上 定男、羽柴 光起、香川 恵造

【研究要旨】

平成 22 年 7 月～平成 25 年 12 月末まで千里中央病院緩和ケア病棟と市立福知山市民病院緩和ケアチームに所属して鍼灸治療介入を行った。期間中に西洋医学的治療では緩和不十分または、患者本人による事情により治療困難となり、緩和ケアチームに紹介された症例の中から鍼灸治療介入に患者本人および主治医の同意を得られた 75 名（男性 54 名、女性 21 名）、年齢 71.5 ± 12.6 歳に対して行った。患者 1 人につき 1～3 愁訴あったため、今回、愁訴別に分類し、疼痛 61 例（癌性疼痛 33 例、その他 28 例）、倦怠感 9 名、呼吸苦 3 名、しびれ 9 例、便秘 9 例、浮腫 3 例、その他 19 例、計 113 例に対して鍼灸治療効果の判定を各々で行った。治療方法は、四肢末端を中心に軽微な刺激で施行した。その結果、鍼灸治療効果は著効 35 例（31.0%）、有効 32 例（28.3%）、やや有効 27 例（23.9%）、無効 3 例（2.7%）、不明 16 例（14.2%）であり、約 6 割に有効であったことが示された。

また、有害事象については、治療直後およびそれ以降でも有害事象は観察されなかった。のべ 1028 回の治療において 5 回の発症であり 0.5%と極めて安全な治療であると考えられる。

ここではデータベースに入力された内容を簡潔に報告する。

20100001 (No. 1)

【症例】61歳、男性。

【傷病】直腸癌術後、右骨盤内リンパ節転移

【治療目的】右骨盤内リンパ節転移による右大腿外側の鈍痛。

【東洋医学的所見】

【足少陽経脈病】足陽明経脈病、血ヲ証(気滯)：疎通経絡・活血化瘀を目的とする。

【治療方法】

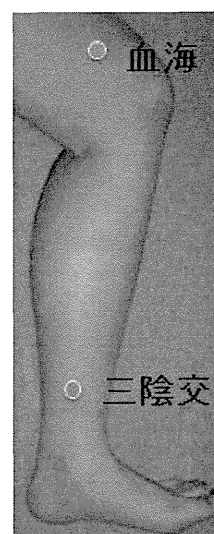
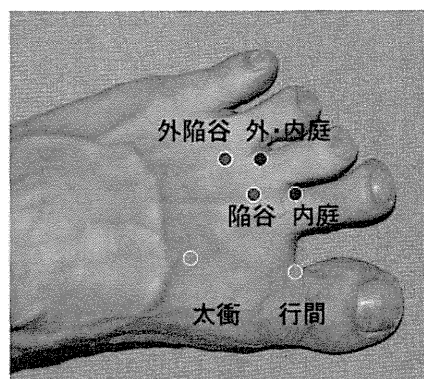
使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm(セイリン製5分-02番鍼)を使用し、刺入深度は切皮程度(1~4mm)とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍔鍼を使用した。鍔鍼は銀製を使用。

使用経穴はその日の患者の状態に応じて選穴するも、【足少陽経脈病】足陽明経脈病に対して俠溪または地五会、内庭または陷谷、外内庭または外陷谷。

活血化瘀に対して行間または太衝、三陰交、血海とした。

【結果】我慢できないほどの痛みではないが、FS=3の痛みが治療前まで、存在していたが、第一診目の鍼灸治療直後よりFS=0となった。2~3日程度で痛みは戻っていたものの、継続的に治療していくうちに、6回目以降から常にFS=0となり、疼痛コントロールが可能になった。しかし、死前期には痛み再現し、オキノームを使用。死前期には強い疼痛が起こる事もあったが、主治医からは服薬量を減量しても、疼痛コントロールができていたとのコメントがあった。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100002 (No. 2)

【症例】84歳、女性。

【傷病】右乳癌、右上腕骨転移

【治療目的】右乳癌、骨転移による癌性疼痛（前胸部痛、上腕内側痛）の緩和を目的に行う

【東洋医学的所見】患者本人には未告知。昼間も痛い、夜間の方が強い痛みがする。なかなか治まらない痛みに対して、イライラしている。ゲップはよく出る。喉が良く渴く、指先を中心にしびれる。裏虚熱、肝胃不和ととらえた。病巣上の経絡異常（手厥陰経脈病、足陽明経脈病）ととらえ、流注上にある末梢にある経穴で治療を開始する。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4mm）とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍔鍼を使用した。鍔鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

使用経穴はその日の患者状態に応じて疏肝理気活血化瘀：蠡溝、三陰交、復溜
通経活絡：

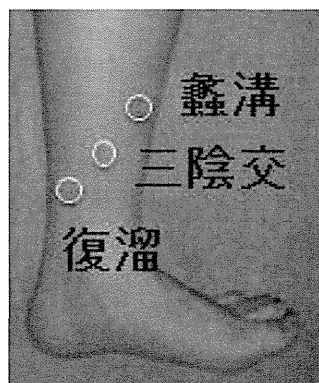
- 1) 足陽明経脈病；内庭、外内庭、侠溪。
- 2) 手厥陰経脈病；郄門、内関。

【結果】初診時NRS=4程度の痛みが鍼灸治療後少し軽減し、夜間痛みで目を覚ますことなく寝る事ができたとのこと。1か月過ぎたころより、痛み以外に手の痺れを訴えるようになる。痛み、痺れともに鍼灸治療直後から痛みが半減したとのこと。

現在、癌は進行しているため、痛みは徐々に頻度を増し、睡眠不足となっているが、施行中または治療を受けた日の晩は痛みを

あまり感じることなく眠れているとのことだった。鍼灸治療効果時間は状態悪化に伴い短くなってきているものの、9時間から12時間は鍼灸治療しない日に比べ痛みが和らいでいる。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100003 (No. 3)

【症例】93歳、男性。

【傷病】進行性の早期胃癌、肝転移

【治療目的】坐骨神経痛に対する右下肢の疼痛緩和を目的とした。

【東洋医学的所見】

右大腿外側部痛のため、電気の走った様な強い痛み。痛みがあるとうつ伏せもしにくい。暖めると少し緩和（入浴後）。肝胃不和、足陽明・少陽経脈病、気虚血虚証。

【方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用。刺入深度は切皮程度（1~4mm）とする。足三里穴には2番鍼で硬結部位に当たるよう1cm弱まで刺入した（足陽明経の疎通）。

体調（気虚、血虚）に応じて皮膚に接触するだけの鍣鍼を使用した。鍣鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

- 1) 足陽明経脈病：内庭、外内庭、地五会
- 2) 気虚、血虚：太衝、三陰交、蠡溝、陰陵泉より選穴。

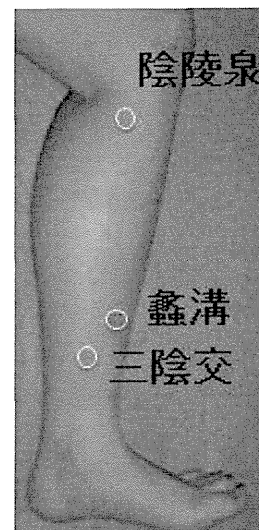
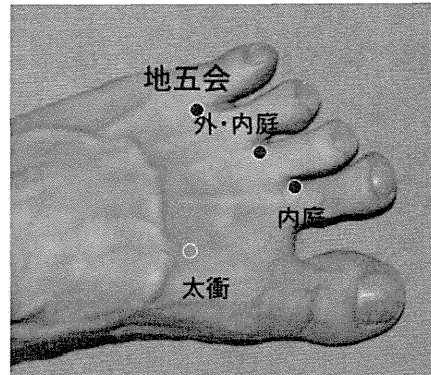
【結果】

初診時、坐骨神経痛の痛みは波があるものの強い時はVAS=92の痛みだった。治療直後VAS=12まで減少。患者本人から鍼灸師に、喋る事は殆どなく、常に怯える表情であったが、2回目の治療時に笑顔がみられた。第三診目の早朝にVAS=70の痛みがあったものの、朝食後から痛みは消失した。その後、弱い痛みが30秒くらい感じられるようであるが、以前に比べると随分楽になったとスタッフから何度か口頭で告げられた。

中止になる以前の状態では鍼灸治療効果時間は初診時の治療直後から痛みの軽減、無痛時間の増加が認められ、2回目から治

療効果の持続時間は増加し続けた。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100004 (No. 4)

【症例】79歳、女性。

【傷病】右乳癌術後、左リンパ節転移乳癌再発、右腋窩リンパ節転移炎症性乳癌様再発

【治療目的】右胸部前面から後面にかけての腫瘍付近の疼痛緩和を目的とする。

【東洋医学的所見】

患者本人から何処がどう痛いのか伝える事はなかった。声は弱く、非常に小さい。何事にも怯えている様子。

疼痛部位は右胸部前面から後面にかけて腫瘍部位付近全体がズキズキと疼くような痛み。肝脾不調・腎陰虚、足陽明経脈病、気虚血瘀証と考えた。流注上から陽明経脈病と判断した。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4mm）とする。

使用経穴は1）血瘀に対して三陰交、2）腎虚に対して復溜、3）足陽明経脈病に対して内庭、外内庭、侠溪。

【治療結果】評価はFSをはじめすべての評価に拒否された。しかし、第1診時には怯える仕草や不安な顔を終始していた患者であったが、第2診時に患者に笑顔がみられるようになるも、コミュニケーションのとれない人のために、鍼灸治療効果については一切不明であった。

【治療開始時の状態】ターミナル後期



20100005 (No. 5)

【症例】85歳、男性

【傷病】左肺腺癌

【目的】医師より心窩部の痛みの緩和を依頼

【東洋医学的所見】

心窩部の痛み中心に治療をすすめるが、患者とのコミュニケーションが不十分な(話せない)為、治療開始前の痛みとしても「ちょっと」と指で表現する事しかできなかった。

常に、「胃から何かこみ上げてくる感じがする」という事から、胃気上逆ととらえ、肝胃不和として臓腑弁証に基づき、治療を行うことにした。脈も点滴が手首の部分でされていた為とれず。舌診ができるような状態ではなかった。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm(セイリン製5分-02番鍼)を使用し、刺入深度は切皮程度(1~4mm)とする。灸刺激は病院内での施術のため、e-Q(チュウオー製造温灸器)を使用する。温度は低温(47°C±2°C、5秒)に設定し3~4回行う。

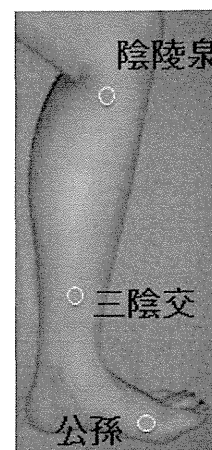
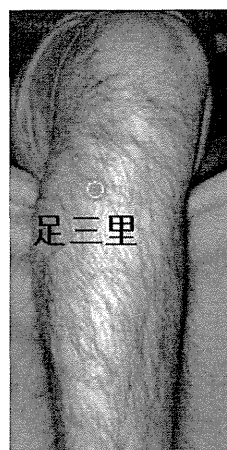
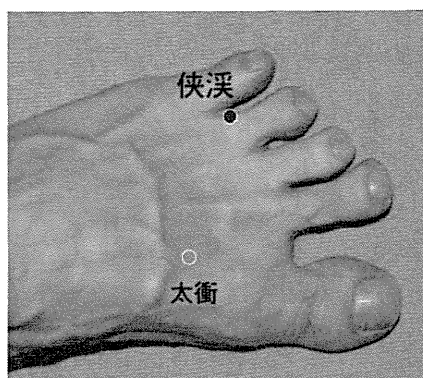
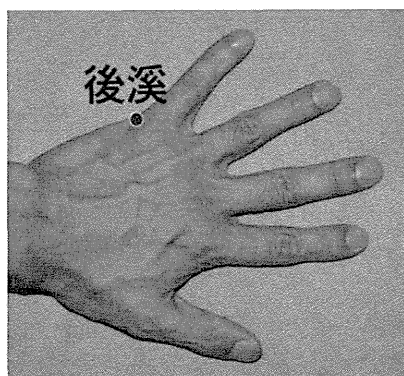
使用経穴、毫鍼：太衝、俠溪、後溪。e-Q(47°C×3)：Th12~L2、公孫、足三里、三陰交、陰陵泉を使用する。

【結果】

回数が少ないという事もあるが、重症患者には従来の評価法NRS、VAS、FSでも評価がとれる状態ではなかった。しかし、治療直後「痛みがあるか？」の質問に対し、首を横に振っていたことから直後は痛みが消失していたと考える。鍼灸治療効果時間はい

つまでかは不明である。

【治療開始時の状態】ターミナル後期



20100006 (No. 6)

【症例】62歳、男性

【傷病】胃癌、骨転移、大動脈周囲リンパ節転移

【目的】医師より、全身倦怠感が強いため軽減を目的に依頼。疼痛はあるが、転移によるものか否かは不明。

【東洋医学的所見】

食事は食べたいが、逆流しやすいため、あまり摂取できない。水分も同様と医師より代返。下肢の冷えが強く、浮腫が足背から下腿全体にある。何度も会話を試みているが、「うん」「ああ」といった言葉しか聞くことができず、本人から何が苦痛かは聞く事は最後まで無かった。

その為、肝胃不和(逆流性)・脾腎陽虚(食欲不振・浮腫)とし、臓腑弁証に基づいた治療を開始する。

脈：数(一息6至)、沈、虚、洪、太白から公孫にかけて軟弱かつ陥凹している。

【治療方法】

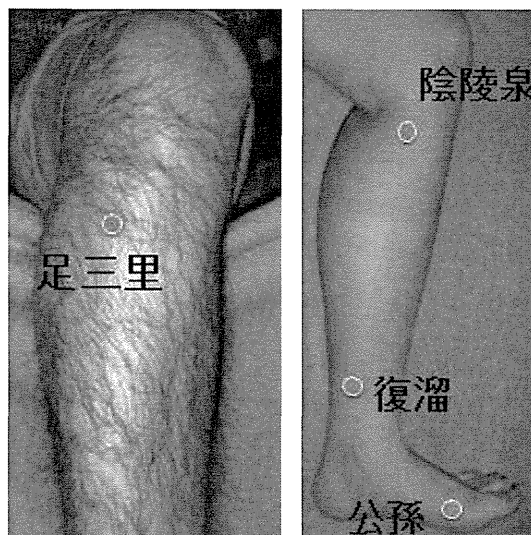
使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm(セイリン製5分-02番鍼)を使用し、刺入深度は切皮程度(1~4mm)、灸刺激は病院内での施術のため、e-Q(チュウオー製造温灸器)を使用する。温度は低温(47°C±2°C、5秒)に設定とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍬鍼を使用した。鍬鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

使用経穴は毫鍼：陰陵泉、復溜、足三里、e-Q(47.5°C×3)：公孫、円皮針：Lt公孫に行う。

【結果】鍼灸治療効果は一切聴取する事はできなかった。

また、後日すぐに亡くなられたため、スタッフによる鍼灸治療前後での印象評価も不明。

【治療開始時の状態】ターミナル後期



20100007 (No. 7)

【症例】84歳、女性 【傷病】右肺線癌

【目的】右肺線癌の胸膜癒着術後による右胸部(胆経)の痛みの緩和。

【東洋医学的所見】

「お乳が痛い」というが、疼痛部位を確認するとだいたい外側(胆経)であった。

胸膜癒着という事で肺経の障害も考えた。喉が渇きやすい。突然イライラする。顔が白い、皮と骨と思えるくらい細い。侠溪～臨泣まで軟弱・圧痛、公孫軟弱、三陰交軟弱。

八綱弁証：裏熱虚、臟腑弁証：肝腎陰虚、経絡弁証：肺経傷筋、気血津液弁証：気虚血瘀証と考え、瘀血・右足の少陽経脈病とし活血化瘀・通経を目的に治療を行った。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）行う。

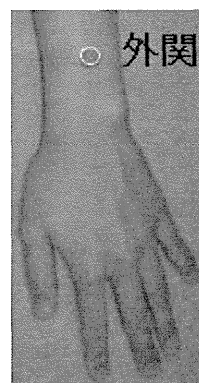
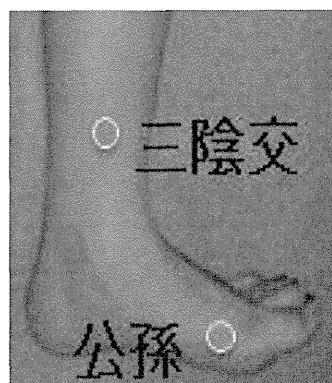
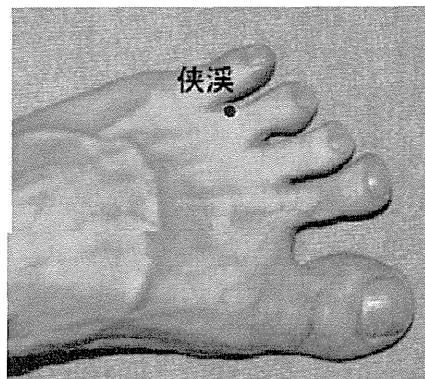
使用経穴は侠溪、外関、三陰交、中府にて治療を行う。

【結果】

患者は話したい事を話すのが、評価になると「痛い、痛い」と何度も確認しても、はぐらかされてしまう。初診時「痛い」と言っていたが、治療直後から「痛みはない」と著効が得られた。また、数回ではあるがNRS評価でも9→2まで減少することもあった。

しかし、スタッフに対する攻撃的な発言や、円皮鍼を勝手に取り、ベッドの柵を蹴るなど、行動も攻撃的になってきたため、中止を余儀なくされた。しかし、鍼灸治療を受けてから寝る時までは楽とのこと。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100008 (No. 8)

【症例】78歳、女性

【傷病】胃癌（胃噴門部周囲を中心に）。

【目的】医師からの依頼は、食欲不振としているが、もともと胃の噴門部の腫瘍のために飲食物が通りにくくなっている事（通過障害）を改善してほしい。

【東洋医学的所見】

唾液とともに胃液も上がってきて下にさがる事は無い。昆布をしゃぶる程度（固形物は吐き出す）。また、食道を何かが通過する度に背部に激痛が走るとのこと。脈：虚・数・沈・弦、舌：薄白苔・燥、爪：白線、外関軟弱、内関軟弱、足三里硬結、太白表面軟弱、深部緊張、三陰交軟弱・圧痛、太衝表面緊張。下肢の軽度浮腫（圧痕が軽度残る）、イライラしやすい

弁証を肝胃不和とし、臓腑弁証に基づいた治療を行う。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4mm）を行った。使用経穴は毫鍼：行間（瀉）、Lt太衝（瀉）、蠡溝、足三里（2番鍼）を行う。

【結果】

初診時から痛みがNRS=10であったものが、治療直後よりNRS=0と著効を示し、全身のだるさもまた緩和することができた。2日後には徐々に戻ってくるとのことだったが、鍼灸治療を受けてから、下肢のだるさも消失し、自力で動かせることが嬉しいとのこと。

食事中、唾液が通過するだけでNRS=10の痛みが10分以上続いていたが、治療を開始してからNRS=7の痛みが10秒程度と減少と

なった。しかし、祝日を挟み1週間治療期間があくと、体調は悪化。ストレスがたまり、隣室患者とのトラブルを起こしていた。

再度週2回の治療を開始する事によって、イライラは減少するも、徐々に衰弱していった。

【治療開始時の状態】ターミナル中期

20100009 (No. 9)

【症例】67歳、男性

【傷病】食道癌、胆のう転移、左肩骨転移。

【目的】医師より、左肩甲骨転移による左上肢の痛みに対しての鍼灸治療を依頼された。

【所見】

左肩のどこか、どのように痛いのか等の問診に対し、非協力的な態度で聴取不可能。

三焦経、小腸経上と思われるも、非協力的な態度であり、また、脈も点滴のため取れず、それ以上の詳細は不明。

【治療方法】

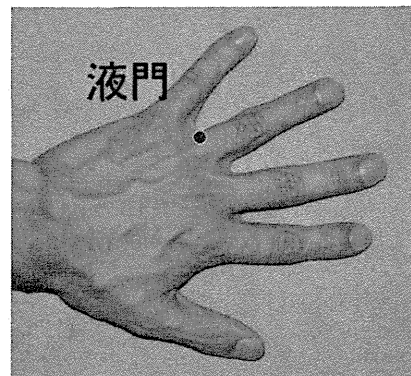
使用鍼：直径 0.2 mm、長さ 0.6 mm（セイリン製円皮針）を使用し、刺入深度は 0.6 mm とする。

使用経穴は Lt 液門。

【結果】

鍼灸治療を同時に麻薬量も増加しての併用治療であった。研究に非協力であり、中止とした。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100010 (No. 10)

【症例】86歳、女性

【傷病】S状・上行結腸癌。右肺・骨転移

【目的】本人と医師の希望から腸蠕動促進を目的に行う。

【東洋医学的所見】

身体細く、皮膚はやや黒い、舌：紅舌、燥、無苔、舌下静脈怒張。

初診時より、声が弱く、低い、聞き取りにくい。耳も聞こえにくく、何度か「え？」と確認される。

胸脇部に少し詰まった感じがあり、期門に圧痛。夜間はそれなりに眠れる時がある。便秘傾向で、2～3日出ないとのこと。薬や看護師らによる摘便が行われていた。脾腎の両虚

【治療方法】

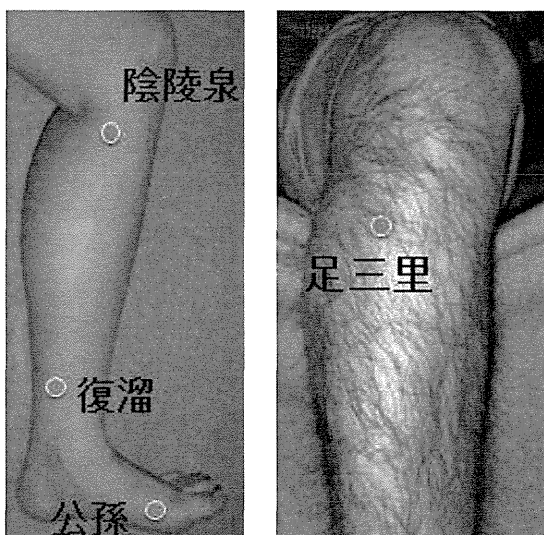
使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、灸刺激は病院内での施術のため、e-Q（チュウオー製造温灸器）を使用する。温度は低温（ $47^{\circ}\text{C} \pm 2^{\circ}\text{C}$ 、5秒）に設定とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍣鍼を使用した。鍣鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

使用経穴は毫鍼：陰陵泉、復溜、足三里、e-Q（ $47.5^{\circ}\text{C} \times 3$ ）：復溜 陰陵泉 湧泉 足三里、円皮針：内 関 足三里に行う。

【結果】便通は服薬等との併用により改善に向かい、中途よりL4-5のヘルニアによる右下肢後面痛に対して行う。NRS=10であったものが、回数が増えていく事で、NRS=7の痛みとなり、治療直後にはNRS=2～3程度

の痛みとなった。徐々に改善傾向に向かっていた。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100011 (No. 11)

【症例】73歳、男性

【傷病】膀胱癌、多発性骨転移

【目的】医師よりの依頼ではなく、本人の希望から「イライラ」「倦怠感」を何とかしてほしいとのこと。

【東洋医学的所見】

イライラしやすく、ゲップもしやすい、お腹も下しやすくなった（パウチ交換などで長時間腹部を出している事も原因の一つ）、胸のあたりが詰まった感じがする、入浴後は気持ちいいのだが、体的には酷く疲れている。

夜中2〜3時に目が覚める事も度々ある。脾腎陽虚・肝鬱気滞と診断した。

脈：数、沈、虚、微弦。舌：暗淡白、白膩苔、怒張すこしあり。

【治療方法】

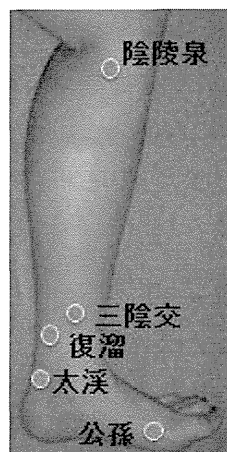
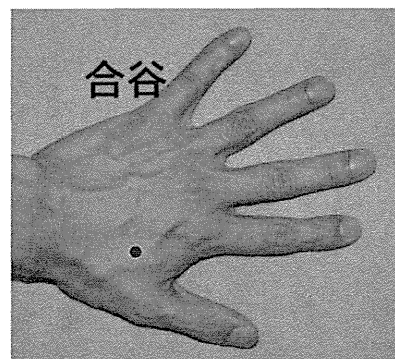
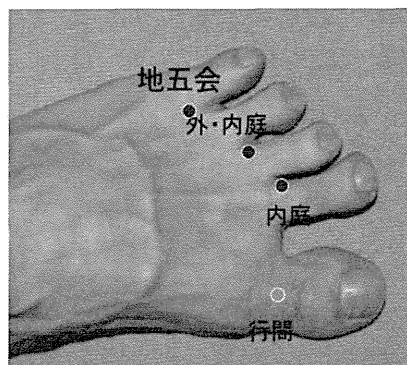
使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1〜4mm）、灸刺激は院内での施術のため、e-Q（チュウオー製造温灸器）を使用する。温度は低温（47℃±2℃、5秒）に設定とする。使用経穴は毫鍼：内庭、外内庭、地五会、足三里、三陰交、復溜、太溪、合谷、行間、公孫、e-Q（47.5℃×3）：足三里、時に太溪を使用した。

【結果】

初診時、治療直後から次の日の朝まで楽だったとのこと。前半での訴えは全身倦怠感であったが、後半ではストレスによる苛立ちの緩和を強く希望された。苛立ちが強くなる時は頭のでっぺんから何か抜けていくような感じがあるとの事だったが、治療直

後の苛立ちは緩和され、「少し落ち着いて眠くなった」と入眠する事が増えていった。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100012 (No. 12)

【症例】63歳、女性

【傷病】左乳癌術後、肝・肺・リンパ節転移。

【目的】化学療法による副作用（全身倦怠感など）、術後疼痛に対し、改善を目的に依頼される。

【東洋医学的所見】

胸脇部の張った感覚、イライラしやすい、グップがでやすい、肩に張った様な頑固なこりがあるという事から肝鬱気滯が強い、左脇の術後によるつっぱり感を足少陽経筋病ととらえる。冷たい飲み物を好む。便秘が多く、下剤を飲むため便秘と下痢を繰り返している。寝汗もおおい。

裏虚熱、肝鬱気滯・腎陰虚、経筋病：左足少陽経筋病、気滯血瘀証と考え、右上肢は経筋治療、その他愁訴に対しては臟腑弁証に基づき、患者本人の希望も含め、四肢末端の経穴を使用した治療を開始する。

【治療方法】

使用鍼：皮膚に接触するだけの鍍鍼を使用した。鍍鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

使用経穴は三陰交または蠡溝、復溜、外関または液門、神門を使用した。

【評価・結果】M.D. アンダーソン、OHQ57（11月11日～12月20日まで）、NRSを使用。

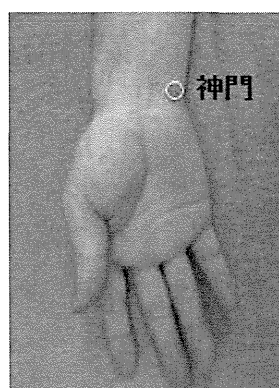
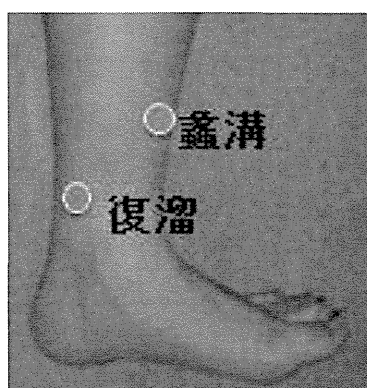
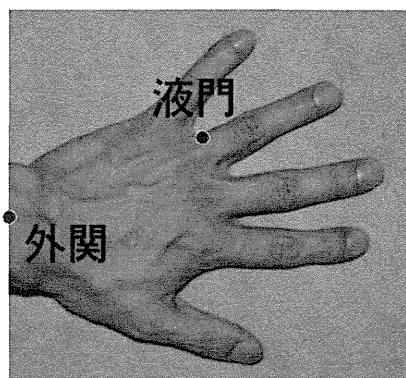
鍼灸治療前半で行われていた、左乳癌術後疼痛に対する OHQ 評価（11/11～12/20）では、鍼灸治療開始前の異常所見である便秘、不眠、症状が移動する、内出血、頑固なこり、お腹の調子などが緩和された。しかし、死前期になるにつれ逆に体の冷え、温飲を好むといった陽虚所見が強く出現していた。

また、死前期に入るところに休日など治療期間があいた事により、急速に悪化。

死に対する不安、恐怖が強くなり、呼吸が苦しくなる、眠れない、イライラする、といった所見も出現し始めた。

本症例では使用鍼を患者希望により鍍鍼で行っていた。軽微刺激でも十分な結果が得られた事で、患者負担がなく緩和ができると言う事を示唆する症例であった。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100013 (No. 13)

【症例】72歳、男性

【傷病】副腎・肺・Th6~7脊椎転移。

【目的】医師より、麻薬を使用しても背部腫の疼痛緩和が不十分なため依頼された。

【東洋医学的所見】

右側臥位が一番楽なため、一日の殆どがその体制。

18日から、リカブセムに変更し、レスキューの回数は減ったものの痛みを訴える事がある。

足背熱感、Th6~7俠脊穴の痛み。足三里緊張、三陰交硬結、太衝緊張圧痛、Lt胆経緊張

脈：浮・遅（54回/分）・滑・右関上微弦、舌：紅舌・無苔。裏熱虚、腎陰虚、左足少陽経脈病、血瘀証と診断。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4mm）、衣服を脱がし患部を出すことができないことが多かったため、背部は皮膚に接触するだけの鍣鍼を使用した。

使用経穴は毫鍼：三陰交、内庭、外内庭、俠溪、鍣鍼：Th6~7俠脊穴。

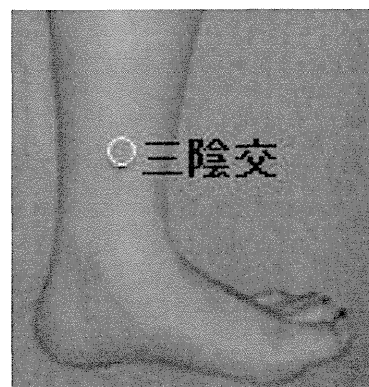
【結果】

三陰交、内庭、外内庭、俠溪を毫鍼、Th6~7に鍣鍼を使用する。初診時より、NRS=8の痛みがNRS=0と消失をみせた。第二診目には痛みは半減し、その後NRS=1まで緩和する事ができた。亡くなる直前にNRS=8まで痛みが増悪し、レスキューを使用するもNRS=6程度まで緩和されるだけで、効果が切れるとNRS=8まで戻り、安眠できないという状態であったが、1回の鍼灸治療にて

痛みの消失効果を得る事ができ、直後から睡眠に入られていた。

本症例は、経絡上末端にある経穴に対し、軽微刺激を行う事で、患者負担もなく、著効がみられた症例であった。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100014 (No. 14)

【症例】80歳、女性

【傷病】膵臓癌

【目的】医師より、腹部の疼痛に対しロキソニンでの対応のため、少しでも現状維持ができればということで依頼された。

【東洋医学的所見】

夜間、特に痛みが増悪する時がある。側臥位で軽減。食欲はないわけではなく、ただ好みの食事ではないので食べない時がある。足三里硬結、公孫軟弱、蠡溝軟弱、寒がり、言葉に力がない、顔に血の気がない。弱い時 NRS=2、強い時 NRS=5 の波のある痛みであったが、NRS=1~2 程度となり疼痛コントロールが以前よりできていた。

【治療方法】

使用鍼：直径 0.12 mm、長さ 1.5 cm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4 mm）を行う。足三里には直径 0.18 mm、長さ 50mm を使用、刺入深度 10mm の施術を行う。また、体調に応じて皮膚に接触するだけの鍍鍼を使用した。鍍鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

使用経穴は毫鍼：陰陵泉、復溜、足三里、脾兪、e-Q(47.5℃×3)：公孫、円皮針：俠溪を行う。

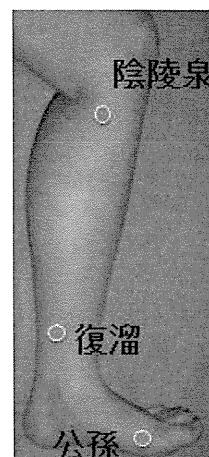
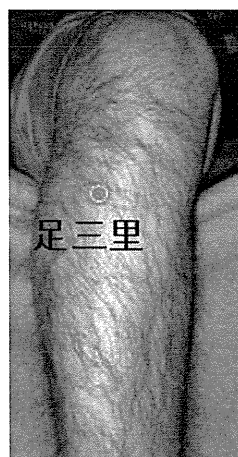
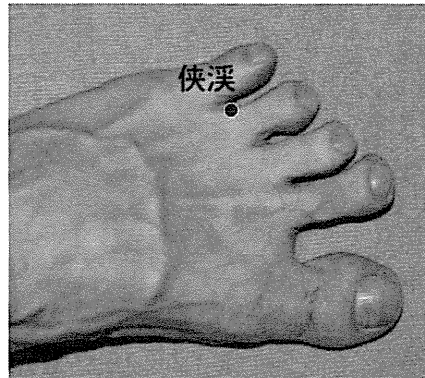
【結果】

鍼灸治療介入時、直後変化を問うも、疼痛コントロールができている状態であったため、「特に変化が無い」とのことだった。しかしながら、服薬効果が切れ始めるころになると、痛みが出現。(NRS=2~3) 治療回数を重ねて行く度に、痛みの出現する強さがマシになってきているとのことであったが、それ以外にも身体的変化として、歩いてい

ても足が楽だったというコメントがあった。その後、積極的にリハビリも行っていったようだったが、休日と重なり、治療期間があくと、ベットから起き上がるのも辛い状態になっていた。

死前期直前、呼吸も荒く、コミュニケーションをとれる状態ではなかったため、鍼灸を受ける状態ではないと説明するが治療を強く希望され、鍍鍼による治療を行うと「足の裏が温かくなってきた」と呼吸も安定し、僅かだが笑顔も見せた。危篤状態直前の状態であったが、著効のみられた症例であった。

【治療開始時の状態】ターミナル中期~後期



20100015 (No. 15)

【症例】74歳、男性

【傷病】中咽頭癌、頸部リンパ節転移

【目的】頸部リンパ節転移による頸部、腰部の疼痛緩和・誤嚥性肺炎予防・圧迫骨折による疼痛緩和

【東洋医学的所見】動くと傷みが増す、薬を飲んでいるのであまり強い痛みは感じないがズキッとした痛みがメインで重だるい・つぶった感じもある。頸部・腰部ともに遊走性の痛みがあり、喉が乾きやすい動くと痛いので殆ど動いていない。下肢冷感あり。

裏熱虚、足陽明経脈病、気滞血瘀証と診断した。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）を行う。足三里には直径0.18mm、長さ50mmを使用、刺入深度10mmの施術を行う。

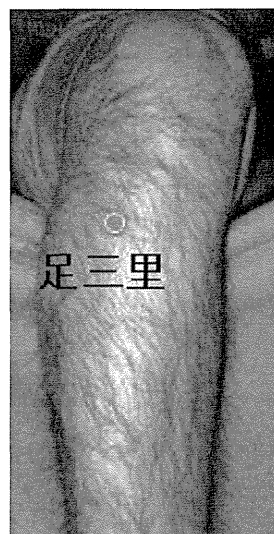
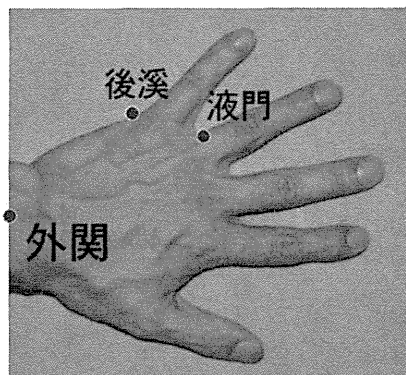
また、体調に応じて皮膚に接触するだけの鍍鍼を使用した。鍍鍼は補法を目的に金鍼、瀉法を目的に銀鍼を使い分けた。

使用経穴は毫鍼：液門、外関、後溪、足三里を行う。

【結果】

NRS=3程度の持続した痛みが頸部に起こっていたが、鍼灸治療を介入させることで痛みが波がでてきた。痛みのない状態が出てきた。しかしながら、治療3回目には、会話が成り立たなくなり、評価を中断するも継続して治療を行った。患者家族より、「苦痛表情はなかった」との事から、投薬

と併用する事で疼痛コントロールが可能となった症例である。



20100016 (No. 16)

【症例】67歳、男性

【傷病】左腎臓がん、肺転移、転移性骨腫瘍

【目的】他の患者で癌性疼痛緩和に著効がみられたので Th6-7 にみられる癌性疼痛に対して行う

【東洋医学的所見】

ズキズキした痛み。昼夜問わず常に痛みが同じ部位にある。本日は服薬して間もないのでどれくらい痛いか不明である。下肢が動かさないままベッド上の生活。皮膚全体が黒く、カサカサしている。

裏熱虚実錯雑、肝鬱気滞・腎虚証、血瘀・気滞・気虚と考え、疏肝理気を中心に治療を行った。

【治療方法】

使用鍼：直径 0.12 mm、長さ 1.5 cm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4 mm）、灸刺激は病院内での施術のため、e-Q（チュウオー製造温灸器）を使用する。温度は低温（47℃±2℃、5 秒）に設定とする。背部には鍔鍼を使用した。鍔鍼は補法を目的に金鍼を使う。

使用経穴は毫鍼：陷谷、外陷谷、地五会、三陰交、鍔鍼：Th6~7 俠脊穴を使用した。

【結果】

治療回数は全 3 回と少ないが、初診時患者本人は変化が無いと言っていたが、主治医からは「治療の次の日は痛みを訴えてくることはなかった」とコメントがあった。しかし、既に死前期に入られていた為、2 診目では NRS=9、治療後 NRS=8 と直後効果

は見られず、また、3 診目では危篤脈がでており、治療を行える状態ではなかった。なお、家族より、苦しまずに逝けてよかったとコメントあり

【治療開始時の状態】ターミナル中期

